

産学連携における古代の食文化を伝える梅を用いた食育実践活動事例

～食を通じて鳥取県八頭町と都市をつなぐ～

Activity of Food and Nutrition Education using Japanese Plums to Convey Ancient Food Culture
through Industry-Academia Collaboration
– Connecting Yazu Town, Tottori Prefecture and Urban Areas through Food –

家政学研究科食物・栄養学専攻
Division of Food and Nutrition, Graduate School of Human Sciences and Design

佐藤 彩
Aya Sato

濱野 夏帆*
Kaho Hamano

三舟 隆之**
Takayuki Mifune

鈴木 礼子*
Reiko Suzuki

*食物学科
Dept. of Food and Nutrition

**東京医療保健大学
Tokyo Healthcare University

抄 録 【背景】JWU 食育ボランティアグループ（公衆栄養学研究室）は、2019 年から NPO 法人ちんじゅの森と連携し、SDGs と食育推進基本計画に沿う食育活動を実施している。SDGs 未来都市に選定された鳥取県八頭町は過疎地域である。【目的】伝統的な食文化を次世代へ継承し、産地と都市の繋がりを目指し、持続可能な食へ繋げる食育活動の評価を行った。【方法】八頭町産の梅を用いて、地域住民へ梅の歴史、効用、活用等の食育活動を実施した。2023 年以降、第 4 次食育推進基本計画及び SDGs の目標について、参加者に Web アンケート調査を実施した。【結果】回答者の約 9 割が食育推進基本計画に沿うと考え、約 8 割が SDGs 目標「陸の豊かさを守ろう」、5 割が「つくる責任・つかう責任」と「住み続けられるまちづくりを」に沿うと考えた。【まとめ】今後も第 4 次食育推進基本計画及び SDGs に貢献し得る食育活動の継続を予定している。

キーワード：SDGs, 食文化, 地域連携活動, 食育, 八頭町

Abstract Background: Since 2019, the JWU Nutrition Education Volunteer Group (Public Health Nutrition Laboratory) has been conducting food education activities in line with the SDGs and the Fourth Basic Plan for Promotion of Shokuiku, in collaboration with the NPO Chinju no Mori. Yazu Town in Tottori Prefecture has been selected as an SDG Future City, although it is also a depopulated area. **Objective:** The aim is to pass down traditional Japanese food culture to the next generation, and to build connections between production areas and cities. **Method:** We conducted food education activities using Japanese plums (“ume”) produced in Yazu Town. From 2023, a web-based survey was conducted. **Results:** Approximately 90% believed that the activities were in accordance with the Fourth Basic Plan. 80% of respondents considered the activities to be in accordance with the SDGs goal of “Life on Land.” **Conclusion:** We will continue this food and nutrition education in the future.

Keywords: SDGs, Japanese food culture, community collaboration activities, food and nutrition education, Yazu Town

1. 緒言

(1) 日本における過疎地域

1955 年以降、日本経済の高度成長によって、地方から都市部へ若者を中心に人口移動が起きた。都市部では人口集中による過密問題が生じ、農山漁村地域では人口減少による地域の生産機能の低下が生じた。総務省では、1975 年から 2015 年の人口減少率が 28%以上、かつ、2017 年度から度 2019 年の 3 箇年平均の財政力指数が 0.51 以下である市町村を「過疎地域¹⁾」と認定しており、2022 年には、全国 1,718 市町村のうち、半数以上の 885 市町村が過疎地域と認定され、過疎地域の面積は日本国土の約 6 割以上を占めている。過疎地域の大部分は農山漁村地域であり、国土の保全、自然環境の保持など、国民生活にとって重要な役割を果たしているが、集落機能が低下し、維持が困難な集落が増加している²⁾。

豊かな自然や伝統文化などの地域資源を生かした地域づくりを進め、地域コミュニティや生活基盤の崩壊・消滅を防ぐべく、積極的な対応が必要である³⁾。2021 年度から「過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法」が制定され、過疎地域について、総合的かつ計画的な対策を実施するための過疎対策が実施されている⁴⁾。

(2) 鳥取県八頭町

鳥取県八頭町⁵⁾、鳥取市の西に位置し、2005 年 3 月 31 日に郡家町、船岡町、八東町が合併して誕生した町である。2024 年 7 月時点の人口は 15,601 人で、面積は鳥取県内 19 市町村の中で 6 番目に大きい。古くから農林業が盛んで、現在も稲作を中心に梨・柿・りんごなどの栽培が盛んに行われている。八頭町は「過疎地域」と認定されている。国立社会保障・人口問題研究所による将来推計人口（2018 年推計）⁶⁾ 及び八頭町人口ビジョン⁷⁾ は、2050 年の総人口は 7,907 人と現在の半数程度となることが予想されている。

一方で、八頭町は 2023 年度「SDGs 未来都市⁸⁾」に選出された^{9,10)}。これは SDGs の理念に沿った取り組みの中で、特に経済・社会・環境の三側面における新しい価値創出を通して持続可能な開発を実現するポテンシャルが高い地域が選ばれるものであり、八頭町の食育推進計画¹¹⁾ の中にも、食育による SDGs 達成について記載されている。

(3) 持続可能な食と食育

我が国及び世界では、持続可能でより良い世界を築くために、2030 年までに達成すべき「持続可能な開発目標：SDGs (Sustainable Development Goals)¹²⁾」を掲げ、17 の目指すべきゴールに取り組んでいる。また、食と SDGs の関わりとして、農林水産省では SDGs に沿った農業者における取り組み¹³⁾ を 5 つ掲げ、生産者から消費者へ、食を取り囲む環境を守り、食の大切さを伝える活動を推進している。

食育基本法¹⁴⁾ に記された基本的な背景に加えて、第 4 次食育推進基本計画¹⁵⁾ において、「持続可能な食を支える食育の推進」として、食生活が自然の恩恵の上に成り立つことを認識し、食べ物を大切にするという考え方の普及や環境への負荷低減などの食と環境の調和（**環境の環**）、生産者等や消費者との交流促進、地産地消の推進等、食の循環を担う多様な主体のつながりを広げ深める食育の推進（**人の輪**）、食育活動を通じて、伝統的な地域の多様な和食文化を次世代へ継承するための食育の推進（**和食文化の和**）の 3 つの「わ」を支える食育を推進している。さらに、国民一人一人の食生活において実践してもらうべく、食育の推進に関わるボランティアの数を増やすことを目標としている。

令和元年国民健康・栄養調査¹⁶⁾ において「居住する地域の人々が「お互いに助け合っている」と思う者の割合」「社会活動に参加している者の割合」がほとんどの年齢層で 50%を下回っており、地域との結びつきの強化に取り組める社会活動の開催が求められている。

2020 年以降のコロナ禍において、緊急事態宣言中ではバランスが取れた食事を摂れていない子どもの増加、間食の機会や量の増加が報告され¹⁷⁾、食育の重要性がますます高まっている。

これまでも食育の推進において、国民一人一人が「食」について改めて意識を高め、「食」について信頼できるエビデンスに基づく適切な判断を行う能力を身に付けることにより、心身の健康を増進する健全な食生活を実践することが重要とされており、食育の役割がさらに重要¹⁸⁾ となっている。

(4) 大学と地域の連携における八頭町との関わり

本学食育ボランティアグループ（公衆栄養学研究室）では、鳥取県八頭町の地域活性化、第 4 次食育

推進基本計画の推進、SDGs に則った食育の実現を目的として、地域に向けた食育活動を行っている。NPO 法人ちんじゅの森（文京区）¹⁹⁾ との食育活動では、八頭町の農産物の梅や柿を活用した梅干し作りや干し柿作り教室を開催し、こども食堂やずびょんち（渋谷区）²⁰⁾ とのボランティア活動では、八頭町の食材を使用した食事の提供、学生主体の食育を行っている。コロナ禍においては、農作物の生産者

とオンライン遠隔形式で生産者側の農家とつながる食育活動を実践とした。

(5) 本実践活動の目的

本実践活動では、梅の活用の食育を通じて産地と都市のつながりを支援し、伝統的な日本の食文化を次世代へ継承する持続可能な食育実践活動の展開を目的とした。



鳥取県 八頭町志子部集落の梅
季節の手仕事～梅干し
2024年6月23日(日)13:00～15:00
NPO ちんじゅの森
日本女子大学・大学院 公衆栄養学研究室
学部4年 濱野 夏帆 修士3年 佐藤 彩

梅干しの作り方

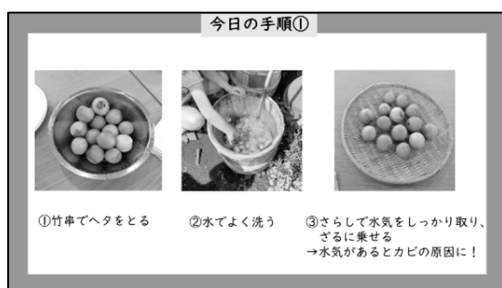
材料

- 梅の実…1kg
- 塩…100g(梅の10%)
- 赤しそ…50g(梅の5%)
- 塩…10g(しその10%)

作り方

1. 梅の処理をする
2. 梅と塩と混ぜ、容器に入れる
3. 重しをのせて漬ける
4. しそを塩で洗う
5. 梅としそを合わせ漬ける
6. 三日三晩の土用干しをする

今日の手順①



- ①竹串でヘタをとる
- ②水でよく洗う
- ③さらして水気をしっかり取り、ざるに乗せる
→水気があるとカビの原因に！

梅の機能性

消化を助ける働き

- ・梅干しを食べることで唾液の分泌が促進されるため、消化酵素が活性化します。
- ・消化管の運動が活発になる。
- ・梅干しのポリフェノールが腸内の善玉菌を増やす。

疲労回復を助ける働き

- ・梅干しのクエン酸が疲労感を軽減する
- ・クエン酸とポリフェノールが疲れにくい体をつくる

菌を増やさない働き

- ・梅干しは細菌の繁殖を防ぐ効果がある

梅干しレシピ①～たこきゅうりのさっぱり丼～

(材料) 2人前

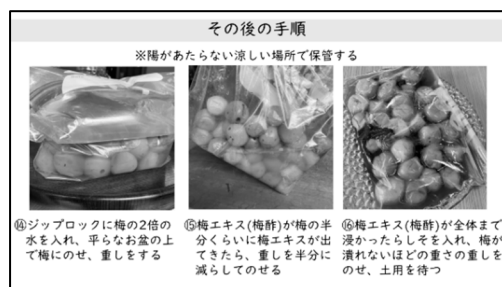
- ・たこ(刺身用) 150g
- ・きゅうり 1/2本
- ・しそ 少々
- ・どろろ 100g
- ・梅干し 1個
- ・ごはん
- ・小ねぎ お好み
- ・みょうが 薬味を好きなだけ
- ・海苔 だけ
- ・しょう油

- ①きゅうりを薄切りにし、塩をかけて、5分置き、よく絞る。
- ②たこは薄切にかぶ切りにする。
- ③梅干しの種を取って、ちぎっておく。
- ④どんぶりにご飯を盛り、どろろ、絞ったきゅうり、たこを乗せ、ちぎった梅干しを散らす。
- ⑤小ねぎや海苔はお好みで盛り付ける。
- ⑥しょう油をかけて完成。

丼でなく小鉢に盛りつけて、おかずにも！火を使わないので暑い夏に涼しく食べられます。

その後の手順

※梅があたらない涼しい場所で保管する



- ④ジップロックに梅の2倍の水を入れ、平らなお皿の上で梅にのせ、重しをする
- ⑤梅エキス(梅酢)が梅の半分くらいに梅エキスが出てきたら、重しを半分にしてのせる
- ⑥梅エキス(梅酢)が全体まで流れたらしそを入れ、梅が流れないほどの重さの重しをのせ、土用を待つ



Fig. 1 : Preparations

2. 活動の内容

本学食育ボランティアグループ（公衆栄養学研究室）は、2019年より、NPO 法人ちんじゅの森と連携し、鳥取県八頭町産の梅を用いた梅仕事教室を6回開催している。本食育活動では、古代からの梅の歴史、効用、活用方法などの講義を含め、参加者同士が会話を楽しみながら梅干しや梅シロップを漬ける内容とした。コロナ禍では、鳥取県の生産者と繋がるオンライン遠隔形式の展開とし、2023年からは対面形式での開催を再開した。

2023年の活動から、第4次食育推進基本計画に含まれる「持続可能な食を支える食育の推進：農山漁村を支える多様な主体とのつながりの深化」及びSDGsの17の目標に沿ったイベントとして、その達成状況について、参加者を対象にWeb アンケート調査を実施した（日本女子大学倫理委員会：承認番号 574）。ここでは梅の食育活動内容（2024年）と達成状況（2023～2024年）について報告する。

(1) 準備

事前に会場である NPO 法人ちんじゅの森と、当日の運営について打ち合わせを1回実施した。

使用する梅は、八頭町の志子部集落到開催日前日に届くよう、梅を収穫していただいた。現代社会に合った梅干し作りの気軽さを実感していただくため、梅はチャック付き保存袋に漬けて自宅で管理していただくこととした。また、当日は八頭町の地域おこし協力隊の方に来ていただき、梅が採れる集落の様子について講話をいただいた（Fig.1）。

(2) 当日の流れ（2024年）

- 11:30 講師担当学生集合、会場準備、食材の下処理
- 12:45 開場：参加者受付
- 13:00 開始：ちんじゅの森の紹介、自己紹介
- 13:05 八頭町の紹介：八頭町地域おこし協力隊の方
- 13:15 梅仕事：学生が主体となって進行、合間に梅の豆知識や梅料理の話
- 14:45 まとめ
- 15:00 終了、片付け

3. 活動の成果

(1) 参加人数・アンケート回答数

参加者は以下の通りである。アンケート回答数は計41であった（回収率89.1%）。

Table 1 : Activities at “Chinju-no-mori”

実施日	参加人数	配信数	回答数	回収率
2021年6月20日	24名	—	—	—
2022年6月26日	21名	—	—	—
2023年6月25日	39名	30	25	83.3
2024年6月23日	19名	16	16	100

*2020年以前の参加者数は不明、参加人数には子どもを含む

**同一家族の場合は代表者1名のみ回答

(2) アンケート結果

Fig.2 にアンケート結果を示す。

Q1.「この活動は『地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えている国民を増やす』ことにつながったと思いますか」という質問に対して、つながったと思う者が95.1%であった。

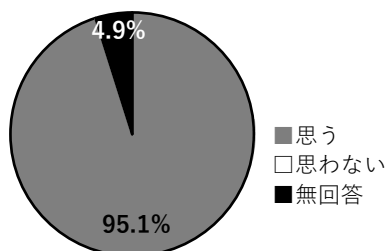
Q2.「この活動は『産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選ぶ国民を増やす』ことにつながったと思いますか」という質問に対して、つながったと思う者は90.2%であった。

Q3.「今まで『八頭町』の名前を聞いたことがありましたか」という質問に対して、聞いたことがある者は31.7%、初めて聞いた者が43.9%であり、全体として八頭町名前を知っている者は75.8%であった。

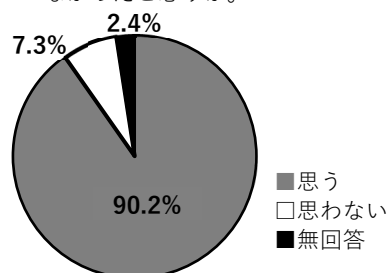
Q4.「この活動が『初めての食育活動』でしたか」という質問に対して、初めての者が43.9%であった。

Q5.「SDGsの17目標のうち、この活動が当てはまると思えるものを、選んでください（複数選択可）」という質問に対して、「15：陸の豊かさを守ろう」が80.5%、「12：つくる責任、つかう責任」が56.1%、「11：住み続けられるまちづくりを」が51.2%、「4：質の高い教育をみんなに」43.9%であった。

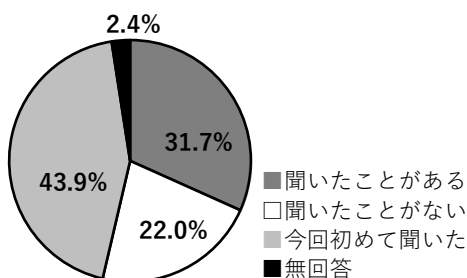
Q1.「地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えていく国民を増やす」ことにつながったと思うか。



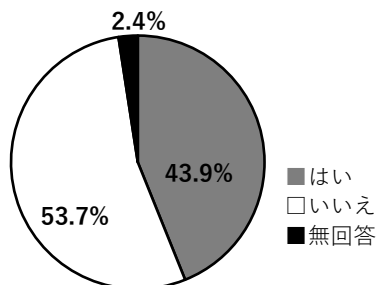
Q2.「産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選ぶ国民を増やす」ことにつながったと思うか。



Q3.今まで「八頭町」の名前を聞いたことがあるか。



Q4.この活動は「初めての食育活動」だったか。



Q5. SDGs の 17 目標のうち、この活動が当てはまると思えるものはどれか（複数選択可）

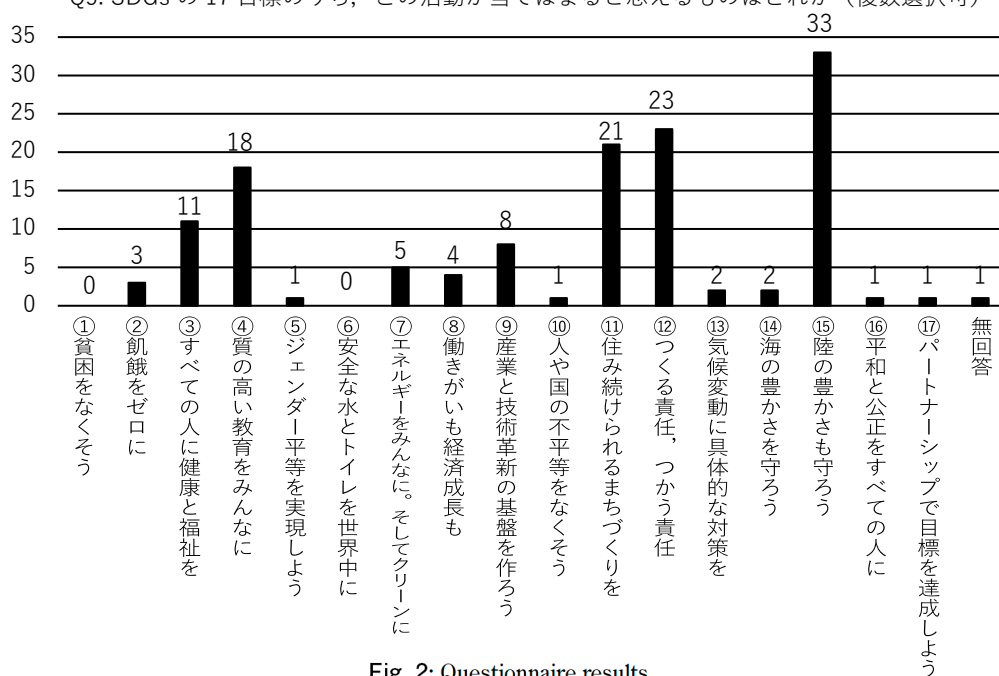


Fig. 2: Questionnaire results

4. 考察

(1) 第4次食育推進基本計画

第4次食育推進基本計画¹⁵⁾において、国民が健全な食生活を送るための基盤としての持続可能な環境が不可欠であることから、重点項目として「持続可能な食を支える食育の推進」として基本的な方針や目標が定められた。自然の恩恵を得て食生活が送られていることを認識し、食の循環が環境へ与える影響への配慮が求められる。そのためには、食べ物を大切にするという考え方の普及や環境への負荷低減など、食と環境が調和するための活動が重要である。

Q1 より、地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等を継承し、伝えている国民を増やすことにつながったと思う者が 95.1%であったことから、食文化の伝承につながったと考えられる。

Q2 より、産地や生産者を意識して農林水産物・食品を選ぶ国民を増やすことにつながったと思う者が 90.2%であったことから、産地や生産者を意識することにつながったと考えられる。

Q3 より、全体として八頭町の名前を初めて聞いた者は 43.9%、知っている者は 75.8%であったことから、本食育活動を通して、八頭町の認知度向上に貢献しうる活動であったと考えられる。一方で、本活動において八頭町名を何回も耳にしたにも関わらず、認知していない者が約 25%であった。これは、梅が八頭町内の志子部集落で採れたものであり、八頭町の説明をしてくださった方も志子部から梅を送ってくれた、という旨の説明をしていたため、八頭町よりも志子部の名前の印象が強かった可能性が考えられる。

Q4 より、本活動が初めての食育活動であった者が 43.9%であったことから、食育推進基本推進計画の目標の 1 つである「食育推進にかかわるボランティアの数を増やす」ことにつながったと考えられる。さらに、初めてではない、継続的な食育活動への参加者が 53.7%と半数以上おり、全体で 9 割以上の者がボランティア活動に参加していると考えられる。

これらのことから、第4次食育推進基本計画の目標を達成できる活動であったといえる。

(2) SDGs

Q5 より、本活動が当てはまる SDGs の目標は、

「15：陸の豊かさを守ろう」が 80.5%、「12：つくる責任、つかう責任」が 56.1%、「11：住み続けられるまちづくりを」が 51.2%、「4：質の高い教育をみんなに」43.9%であった。

「15：陸の豊かさを守ろう」は、森林伐採や気候変動から動植物が生育する土地や農地を保護し、陸に住む生き物の生態系を守る目標である。食を支える農林水産業を持続可能とする八頭町の梅の食育は、八頭町の農業の活性化や生産地の保護につながり、陸を守ることに繋がると考えた者が約 8 割いたと考えられる。

「12：つくる責任、つかう責任」は、食べ物や物を無駄にしない目標である。八頭町の梅を栽培・収穫してくださった方への感謝、また、個人で消費できる分の梅を自分自身で漬けた経験から、保存食である梅干し、食べ物に対して責任を持って向き合うことにつながったと思った者が半数以上いたと考えられる。

「11：住み続けられるまちづくりを」は、自然や交通、公共施設などが整い、人々が安全で安心して住み続けられる街をつくる目標である。食育を通して、特産物などから地域の価値を高め、町を活性化する取組みが可能である。先行研究²¹⁾では過疎地域との交流を通して、その地域への愛着が生まれることが報告されていた。本活動は都内で実施したが、使用した梅が遠く離れた鳥取県八頭町で大切に育てられたことを認識したことで、八頭町に暮らす人や町を大切にしていきたいと思う者が半数以上いたと考えられる。

「4：質の高い教育をみんなに」は、社会や大人の都合で子どもが教育を受けられない状況を改善するための目標である。食育では、食を学ぶ機会を子どもから大人の全ての人に提供することであると考えられる。本活動の参加者は、地域住民と本学学生、親子、または一人での参加など、様々な年代であった。子どもは楽しく参加でき、大人は新たな学びがある内容に心がけたため、4 割以上の参加者が、本活動が質の高い食育だと思ったと考えられる。

以上により、本活動は SDGs の目標の達成に貢献しうると考える。

(3) 持続可能な食・食育：環境の環

本活動では、都市から遠く離れた地域で大切に育てられた梅を用いて、自分自身で食べるための梅干

しを漬けたことにより、食材の生産から食品の完成に携わる機会を設けることができた。普段であればスーパー等では販売されない少し傷のついた梅を見て、傷んだ部分を取り除けば食べられることや、余った赤紫蘇をジュースにして飲む経験をしたことで、食材を無駄にしないこと、食に対する責任を持つ意識を芽生えさせ、持続可能な食につなげられたと示唆される。

また、自由記述より、梅ができるまでの様子も知りたいという意見があったため、今後は、食育内容に梅ができるまでの栽培の様子や収穫の苦労なども組み込むと、食べ物をより大切にしようとする気持ち芽生ええると考えられる。

先行研究では、食材を買ってすませること、超加工食品(UPF)と不健康・疾病の関わりについて様々なエビデンスが報告されており²²⁾、スローフードや手作りへ回帰し、持続可能な食について、食生活の中で考えていく必要があると考える。

(4) 都市と地方の繋がりと食：人の輪

本活動は梅を漬ける活動がメインとなったが、八頭町で活動する方から写真を用いて様子を説明していただいたため、地方への興味・関心を抱かせる活動とすることができた。コロナ禍では、八頭町の方とオンラインでつなぎ、都市の参加者と直接話をする機会を設けていたため、今後の活動に組み込むことで、地方と都市をより強固につなぐことができると考える。

2024 年度から開始された健康日本 21 (第 3 次)²³⁾では、「地域の人々とのつながりが強いと思う者の増加」「社会活動を行っている者の増加」などが目標に掲げられた。本活動では、大学と NPO 法人が連携した活動を行うことで、地域住民の食環境づくりに貢献するだけでなく、大学生の地域・社会連携の学外活動の機会を増やし、大学内でできる教育を超えた経験として大きな効果があると考え²⁴⁾。アンケート結果から、食育活動を行う者の増加に繋げることができた一方で、作業に集中するあまり、参加者同士の会話があまり弾んでいないように見えたため、参加者同士でも交流ができるよう、ゆとりのある活動にすることが望まれる。今後は、地域を活性化することで地域の繋がりを強固にすること、地方で生産される食材を国内で消費するために地域での食育活動を行っていくことで、望ましい食環境を

つくる必要があると考える。

食を通じて食の循環を担う多様な主体のつながりを広げ、深めることができたと考える。

(5) 食文化の伝承：和食文化の和

本活動では、日本独自の食文化を現代へ継承するために、古代から育まれてきた梅の活用に関する食育を行った。2 年連続で参加してくださった方から、梅仕事に挑戦する前は手間暇がかかると想像していたが、昨年、みんなで一緒に作業したことで、簡単に楽しいと感じたため、今年度はスーパーで青梅が並び始めたころに、自宅でも梅干しや梅シロップを漬けてみた、と話を伺った。また、子どもたちが食べ物へ興味を持ち始めたという自由記述から、食材に触れる経験は、食への感謝の念を育むと共に、次世代へ食を繋げられるきっかけになることを認識した。食文化の継承のためには、文化に触れる機会を増やすことが重要であると考え、今後も食育活動を通じて、伝統的な地域の多様な和食文化を次世代へ継承するための食育を推進していきたいと考える。

(6) 限界と今後の展望

本アンケートの回答は参加者の自由意思に基づくものであり、回収率が 100%ではなく、特に 2024 年は自由記述の回答は多くなかった。しかし、自由記述のアンケート部分には、本活動の目標達成だけでなく、今後の活動の発展につながる貴重な意見が多く寄せられ、本活動のさらなる発展が期待される内容であった。

SDGs の達成状況については、SDGs の目標や食に関する理解度によって、選択が難しいのではないと思われる。例えば、「⑪ パートナリーシップで目標を達成しよう」は、先進国が開発途上国へ支援し、世界の人々が力を合わせて発展させていく目標であるため、直接的には本活動が当てはまるとは考えにくいと予想される。一方で、食育の視点からの「⑪ パートナリーシップで目標を達成しよう」は、生産地(地方)と消費者(都市)を繋ぎ、国としての食の維持・発展を目指すことも含まれるため、本活動が当てはまる。食育活動と SDGs の繋がりは、実施者が SDGs への理解を深め、参加者へ伝えることが必要であると考え。

2024 年は梅が不作の年であったが、八頭町志子

部集落の方が丁寧に梅のお世話をしてくださり、とても状態の良い梅が届いた。そのため、採れたての梅の香りを参加者が体験し、笑顔になっていたのが印象的であったが、梅が東京に届くまでにどれだけの手間をかけていただいたのかを伝えることができず、単に状態の良い梅を梅干しにただけの会になってしまった感がある。次年度以降は梅が届くまでの話も食育に組み込み、梅が自然の恩恵と生産者の努力により、手元に届いていることを実感できる内容にしたいと考える。

5. まとめ

この梅を用いた食育実践活動は、伝統的な和食文化を次世代へ継承でき、産地と都市のつながりを構築し、持続可能な食に繋げる食育実践活動となった。今後も、SDGs への理解を深め、地方と都市とのつながりを強固にする食育活動として、日本独自の食文化を現代へ継承する持続可能な食育実践活動の 1 事例として継続的に活動予定である。

6. 謝辞

八頭町志子部集落、NPO 法人ちんじゅの森、参加していただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

7. 研究助成

本研究の一部は科研費の助成を受けて実施したものである (A20H00033)。

8. 参考文献

- 総務省. 過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法. 2021 [cited 2023 0916]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000744745.pdf.
- 総務省地域力想像グループ過疎対策室. 令和 3 年度版過疎対策の現況 (概要版). 2023 [cited 2024 0925]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000875712.pdf.
- 総務省過疎問題懇談会. 過疎地域等における今後の集落対策のあり方に関する中間とりまとめ. [cited 2024 0925]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000304087.pdf.
- 総務省. 過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法概要. [cited 2024 0925]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000807173.pdf.
- 鳥取県八頭町役場. 八頭町公式ホームページ. [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.town.yazu.tottori.jp/>.
- 国立社会保障・人口問題研究所. 日本の地域別将来推計人口 (平成 30 (2018) 年推計). 2018 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson18/t-page.asp>.
- 鳥取県八頭町役場. 八頭町人口ビジョン. 2020 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.town.yazu.tottori.jp/uploaded/attachment/3005.pdf>.
- 内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局. 地方創生 SDGs 「環境未来都市」構想・広域連携 SDGs モデル事業. [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.chisou.go.jp/tiiki/kanryo/index.html>.
- 鳥取県八頭町. 八頭町が SDGs 未来都市に選定されました. 2023 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.town.yazu.tottori.jp/soshiki/1/5340.html>.
- 鳥取県八頭町. 八頭町 SDGs 未来都市計画. [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.town.yazu.tottori.jp/uploaded/attachment/5494.pdf>.
- 鳥取県八頭町. 八頭町食育推進計画 (第 3 次). 2022 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.town.yazu.tottori.jp/uploaded/attachment/2235.pdf>.
- United Nations. [cited 2024 0925]; Available from: <https://sdgs.un.org/goals>.
- 農林水産省. 農業女子 PJ. [cited 2024 0925]; Available from: <https://nougyoujoshi.maff.go.jp/sdgs-home/>.
- 農林水産省. 食育基本法. 2015 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-20.pdf>.
- 農林水産省. 第 4 次食育推進基本計画. 2021 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/attach/pdf/kannrennhou-24.pdf>.
- 厚生労働省. 令和元年国民健康・栄養調査結果の概要. 2020 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000687163.pdf>.
- 国立研究開発法人国立成育医療センター. コロナ流行下のこどもの食事への影響に関する全国

- 調査. 2021 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.ncchd.go.jp/press/2021/210824.html>.
18. 農林水産省. 令和4年度食料・農業・農村の動向. 2023 [cited 2024 0925]; Available from: https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/r4/pdf/zentaiban.pdf.
19. NPO 法人ちんじゅの森. NPO ちんじゅの森. 2001 [cited 2024 0925]; Available from: <https://www.chinju-no-mori.or.jp/>.
20. 一般社団法人 Kid'sGarden. Kid'sGarden. [cited 2024 0925]; Available from: <https://kidsgarden-shibuya.com/>.
21. 須賀由紀子, 大学の地域連携のあり方を考える
—持続的農村発展と都市部学生の関係づくりから—. 実践女子大学生活科学部紀要, 2023. 第 60 号.
22. Taneri, P.E., et al., Association Between Ultra-Processed Food Intake and All-Cause Mortality: A Systematic Review and Meta-Analysis. Am J Epidemiol, 2022. 191(7): p. 1323-1335.
23. 厚生労働省. 健康日本 21 (第三次). Available from: https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkounippon21_00006.html.
24. 中塚雅也, 小田切徳美, 大学地域連携の実態と課題. 農村計画学会誌, 2016. 35(1): p. 6-11.